古田暁先生のご退任に際して

石　井　米　雄

幕末のころ、外国語を通訳する人間は通弁と呼ばれたらしい。上級の役人は外国語ができなくても、通弁を使いさえすれば、外国人との間に意思を通じ合うことができた。通弁はのちに通訳官と呼ばれるようになる。しかし、名前は変わっても、通訳官の地位は、決して高くはなかった。かれらは交渉の内容に直接タッチすることを許されず、もっぱら翻訳機械として、話の内容を過不足なく先方に通じさせる属官にすぎなかった。通訳官は外交官ではなく、外交官の補助者にすぎなかった。日本における外国語教育の歴史を考えるとき、この歴史的事実はかなり重要である。日本国政府は、もっぱら外国語を教育する高等教育機関を作った。外事専門学校、のちの外国語大学がそれである。しかし創設者がそれに期待したのは、どうやら「通弁」の養成であったらしい。事実、官庁であれ、会社であれ、外国との折衝において、判断を要求されるような仕事をまかされるのは、この種の学校の出身者であることはむしろまれである。かれらに期待された役割は、上司の発する信号を、相手方の外国人に理解可能な信号に変換する、ただのインターフェイスに過ぎなかった。

外語大学にたいする世間の評価の背景に、こうした歴史的事実があるとしたら、それはまことに不幸なことといわなければならない。なぜなら、外語大学とは、単に外国語の運用能力を鍛える場所ではなく、(それは外語専門学校の仕事である)、その外国語を生みだした文化に対するトータルな理解を得しめる場所でなければならないからである。200 年の永い伝統をもつフランスのいわゆる「東洋語学校」が、INALCO すなわち「東洋諸語・東洋諸文化研究大学」と改称されたのも、いわれなしとしない。そこで学生たちは、東洋の言語だけでなく、高度な文化をもまた学ぶことが要求されるのである。

わたくしは、外語大学とは、高度な外国語の運用能力と、その外国語の背後にある文化を理解できる深い教養を学生に与える教育機関でなければならないと思っている。この場合の教養とは、英語でいうところのLiberal Arts の諸科目を指す。2年まえ、学長職を拝命したわたくしは、ふたつのことに強い印象を受けた。ひとつは「異文化コミュニケーション研究所」という研究所をもっていること。もうひとつは、教員の顔触れが実に幅広く、外語大学らしからぬ重厚なスタッフがそろっていることである。わずか80名あまりのファカルティのなかに、西洋古典語を教授できるスタッフが4名もいることを知って、わたくしは驚愕し、同時にまことにうれしく思った。あとでわかったことなのだが、わたくしをして驚愕させたこのふたつの事実の「仕掛人」は、どうやら同一の人物で、それが創設以来異文化コミュニケーション研究所の所長を勤められた古田暁先生と知った。さすが *Encyclopedia of Japan* の編集主幹をされた先生ならではと、尊敬の念を新たにした次第である。

古田先生は、このたびご定年を迎えられ、異文化コミュニケーション研究所所長、神田外語大学教授の職をご退任になる。神田外語大学が、21世紀に向かっておおきな改革を目指そうとしている矢先のことだけに残念でならない。神田外語大学が、冒頭に述べたような「外国語大学」の悪しき先入観から脱却し、まったくあたらしい理念に立った、真の意味での「外語大学」へむかって飛翔するにあたり、いまこそ先生の sapientia を発揮していただくことを念願し、先生に、本学にあらたに設けた「学術顧問」の第一号にご就任いただくことをお願いし、ご承諾を頂戴することができたことは、せめてものなぐさめである。先生にはくれぐれもご自愛くださって、神田外語大学の発展のためにお助けいただきたいと念願する次第である。